1.八幡地区について

1-1.八幡地区の今後にむけた方向性の検討 -意見交換会の開催

ケーススタディを進めるにあたって、これまで５回にかけて行ってきたワーキンググループ会議の中で、八幡地区をサイン整備重点地区のモデルケースとすることを設定した。そのことを受け、意見交換会というかたちで地元でこれまでの経緯とサイン計画について解説を行うとともに、八幡地区はどういうところか、また今後地域をどうしていきたいかという地域づくりの観点から広くご意見をいただき、基本的な方向性を以下のように設定し、具体的な計画をまとめた。

【広域誘導の観点から】
●八幡地区の田園景観と湿原を含めたまとまりを「八幡高原」とする
●八幡高原を広島県の公共サイン再編整備事業においても誘導先として設定してもらう→広島県には要望済み
●八幡地区とは聖湖も含めたまとまりを指し、アクティビティの豊富さも魅力とする
●将来的に様々な「八幡高原ブランド」を意識するためにもエリア感の訴求は重要
●八幡高原とするエリアへの入口にはしっかりとゲートサインを整備する

【八幡地区内】
●八幡湿原＝霧ヶ谷湿原とし、元々の八幡湿原には誘導しないこととする
●高原の自然館を基点とした自転車ルートを設定する（地元では有志でサイクリングを行っていたりもする）
●トイレが少ないという問題があることから、中核施設として八幡高原センターの使い方を検討する
●古代八幡湖遠望地は眺めがよいのでベンチを置く（眺望ポイントとしての設えの検討）
●芸北の薪活に見られるように木材をこの八幡地区のらしさづくりのためにどのように活かすか大切
●既存の「八幡高原文化の道」の説明サインは、そのままか、内容を改修するか、建て替えるか、状況によって判断する
●観光客をどのように受け入れるか、またどのように地域を考えるかのために今後「地域憲章」の策定について考える

（参考：意見交換会議事録）

サイン整備実施計画作成に係る意見交換会
（八幡地域）

【日　時】平成２７年２月１７日（火）　１９:００　　２０:３０
【場　所】北広島町八幡　八幡高原センター
【出席者】高木区長、川内さん、河野さん、くらたさん、前さん、佐伯さん
ほか八幡の方　全１２名
北広島町役場企画課地域振興係　近藤・吉岡

議　事　内　容

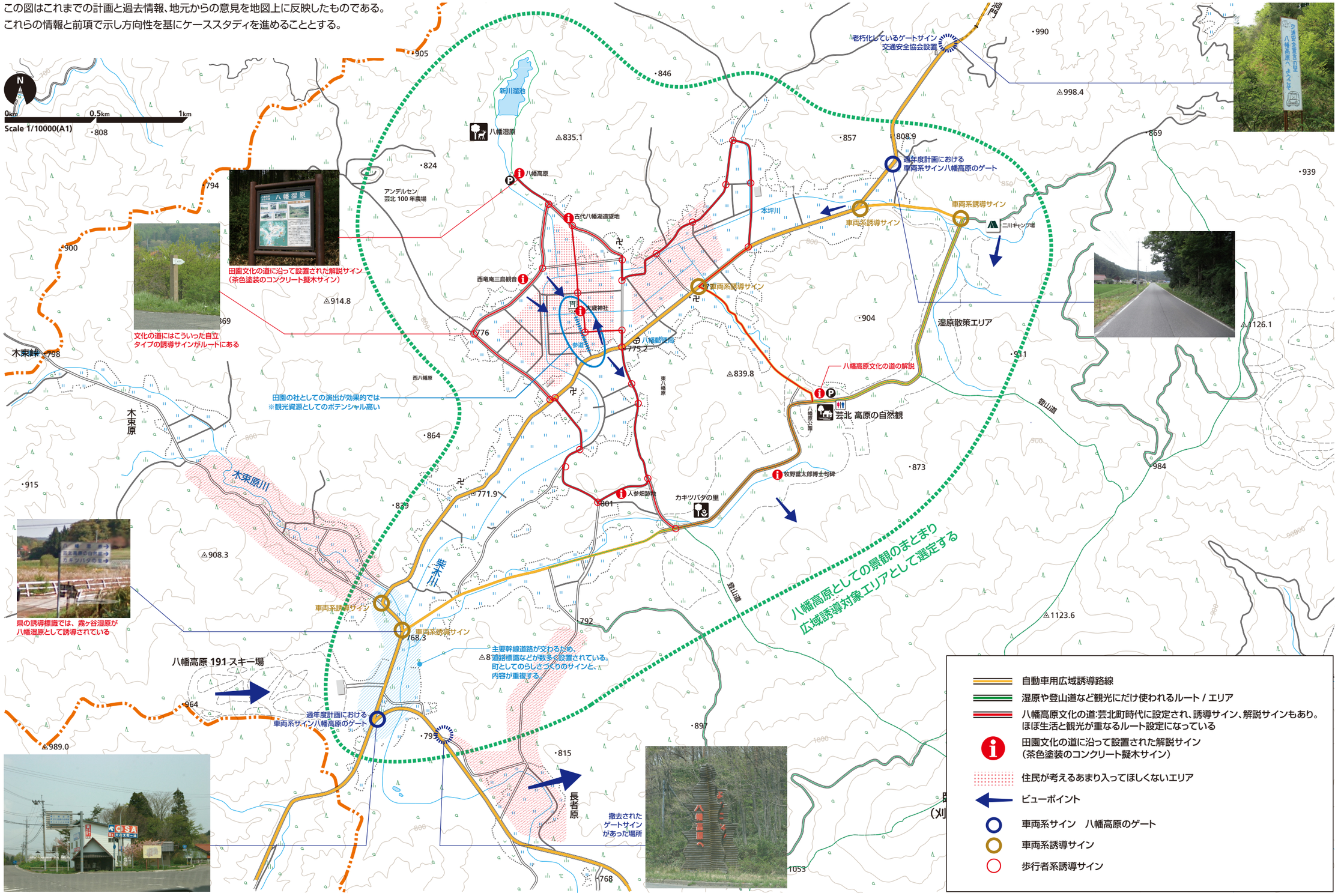
町から、これまでのサイン計画に関する取組と今後の予定、八幡をモデル地区として考えており地元の意見を計画に反映させたい旨を説明。
その後、テーマごとに意見交換を行った。(2 人・４人のグループで意見を出し合い、発表)

１．八幡高原はどこか？
　○国道と高原の自然館前道路で囲まれたエリア
　○高原の自然館前道路付近のエリア
２．八幡湿原はどこか？
　○むなくと
　○霧が谷
　○カキツバタの里付近も含めて湿原といえるのではないか？
３．観せたい場所はどこか？
　○臥龍山（刈尾山）が見える景色
　○聖湖キャンプ場入口からのスキー場の景色
　○二川キャンプ場入口付近からの夕日
　○スキー場からの景色
　○トンネル出口からスキー場までの風景
　□ いい景色を探してもらうのもありでは？
　□ いい景色を眺められる場所にベンチを置いてもいいかも？（古代八幡湖眺望地付近）
　□ 芸北町でつくった「文化の道」でルートが考えられているので参考にしたらよい
４．入ってほしくない場所
　○新川溜池付近
　○尾関沼付近
　○私有地の畔□ パンフレット等で、やわらかい方法（方言を使うなど）で伝えてはどうか？
　○木東原（迷って入ってきて、畜舎に入られることがある。伝染病予防の観点からも立ち入り禁止としたい）
　○自宅庭に入って花を盗られたりすることもある
　○神社はいいところなので案内したいが、案内するとずかずかと入る人がでないか心配
　□ 入ってほしくないところには個人差がある。
５．大事にしたい風景
　○人工物が少ない□ 看板も少ないほうがいい。
６．デザイン
　○看板も少ないほうがいい。
　○シンプルなものがいい。

その他
　○北広島町だけでなく安芸太田町とも連携して、広範囲でルートがわかる案内をすべき
　○ナビでちゃんと案内されるようにする□ ないほうがよい看板もあるが目的地に着いたことがわかるような看板は必要なのでは？
　○派手な看板は景観を壊す
　○洞門からの三差路付近看板は、道路改良に合わせて位置の変更などの修正が必要
　○基本的には、まずは高原の自然館に誘導する。
　○旧八幡小のところにも総合案内看板があった。
　○取り外し可能な看板や、イベントの開催時期等も盛り込まれた看板があってもよいのでは？

1-2. 八幡地区（八幡高原）の概況

この図はこれまでの計画と過去情報、地元からの意見を地図上に反映したものである。
これらの情報と前項で示し方向性を基にケーススタディを進めることとする。



2. 自転車を想定した観光ルート

2-1. 八幡地区サインクリングルートの設定案

八幡地区の観光のための周遊には自転車での移動を想定し、高原の自然観を基点とした3本のサインクリングロードを設定し、サイン整備、環境整備の基線とする。これまでの現地での意見交換会等を踏まえ、入って欲しくないエリアは極力外すこととする。
また、眺望ポイントである古代八幡湖遠望地にはベンチ等の休憩のための整備を行うとともに、八幡高原センターを観光の中核拠点としての整備も検討する。

A　田園景観ルート

八幡地区の美しい田園景観を楽しむルート。
途中に八幡高原センターや古代八幡湖遠望地をふくむバラエティに富んだルート設定。

所要時間:　約**30**分　約**6.6**km

B　霧ヶ谷湿原ルート

二川キャンプ場から湿原方面のルート。
距離も短く自然景観を気軽に楽しめるルート設定

所要時間:　約**20**分　約**4.0**km

A（+B）八幡高原ルート

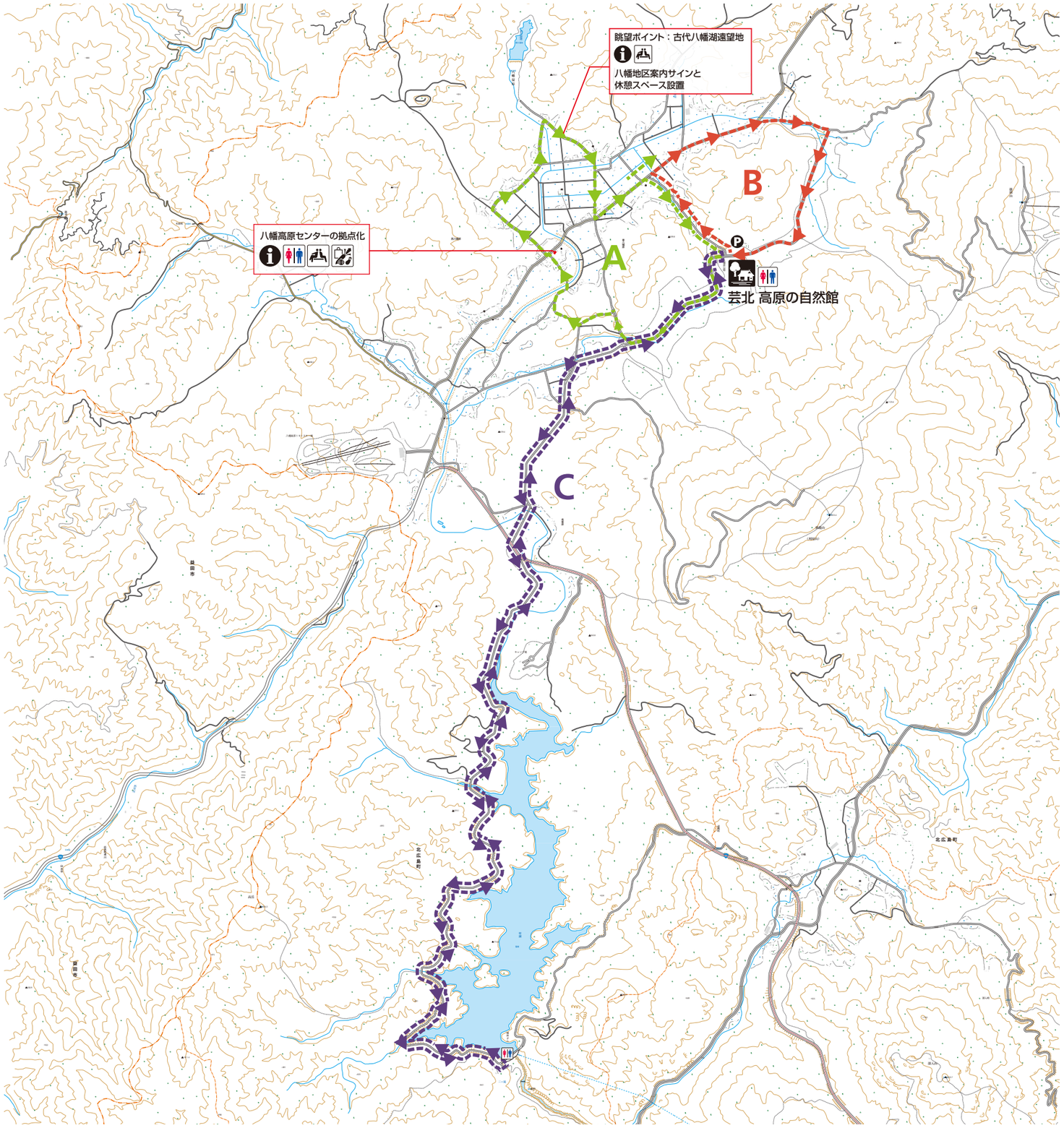
八幡高原が織りなす景観を一通り満喫できるルート。
基本的な周遊ルートとして位置付けられる

所要時間:　約**40**分　約**8.8**km

C　八幡高原～聖湖ルート

比較的長距離の自然景観とともにサイクリングを楽しむルート。
アップダウンもあり、健康増進やスポーツとしてのサイクリングの意味合いも付加できるルート設定。

所要時間:　約**90**分　約**19.4**km



2-2. 八幡地区のサイン種別・サインプロット

以下に示すのは八幡地区におけるサインの全体像である。主に車で高原の自然館に向かうときに必要なサインと、高原の自然館を基点とする自転車周遊時に必要なサインをプロットする

広域誘導に関連するサイン類

G 境界サイン

八幡高原に来たことを伝えるサイン

誘導サインor誘導ポイント

基本的には広島県の設置するサインを案内の基本とするが、主要な交差点にはそれをフォローするようにサインを整備するか、その場所自体の環境整備を推進する。

施設記名サイン

到着を知らせる所在サインを「芸北　高原の自然館」や「八幡高原センター」に設置する。合わせてロゴタイプも今後検討する必要がある。

地元民にとって身近なスケールのサイン類（メンテナンスや運営にも関係する）

八幡地区案内サイン

八幡地区全体マップと回遊ルート･見どころを示す。
高原の自然館／八幡高原センター／古代八幡湖遠望地／聖湖南端に設置を検討。

回遊サイン

高原の自然館を起点に回遊ルートを示すサイン。
各交差点などや距離単位で設置し、高原の自然館からの距離やトイレの方向など必要に応じて記載する。基礎無しの埋め込み式として臨機応変に数を増減できるようにするとともに、定期的なメンテナンスを実施する。

説明サイン

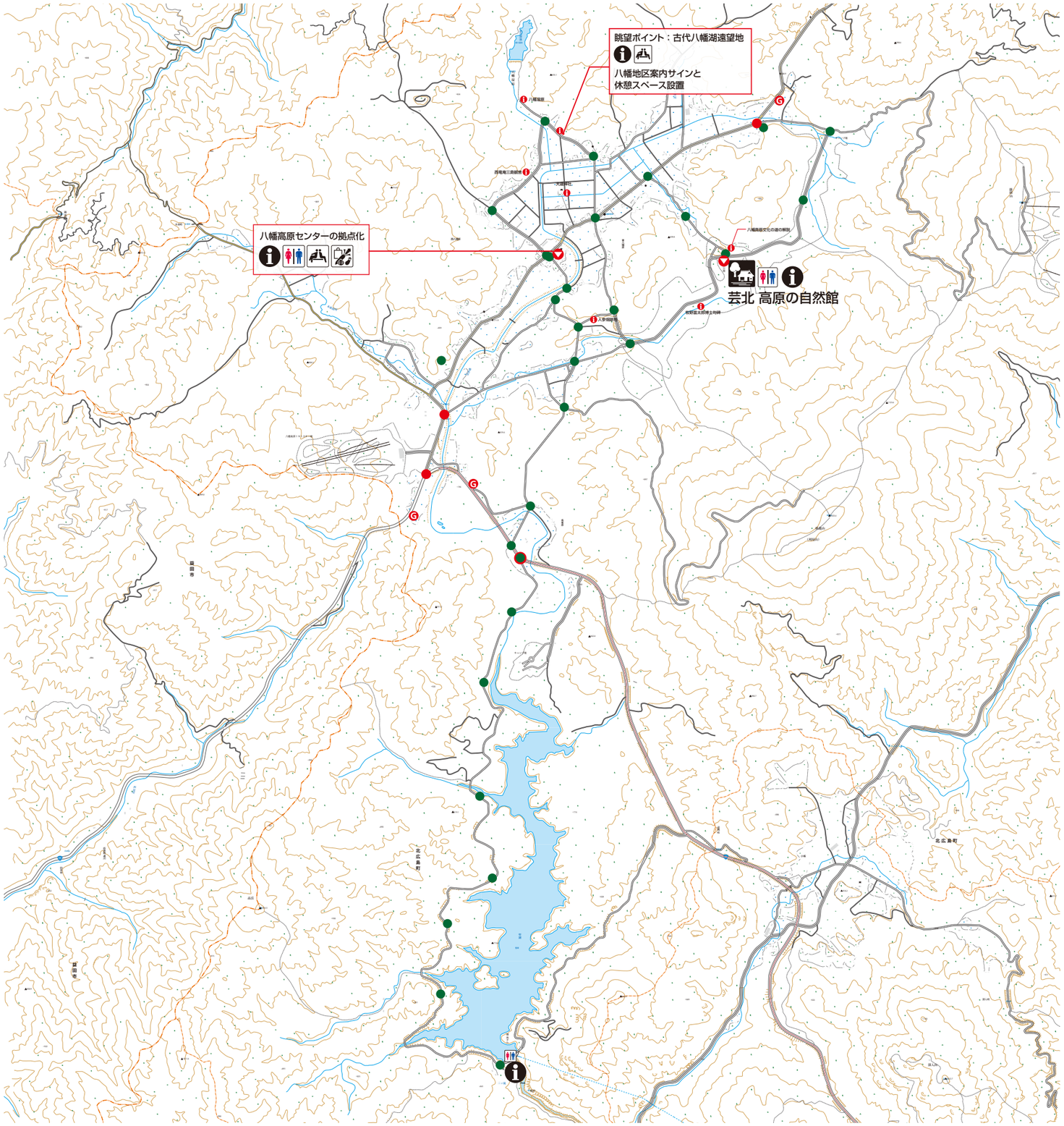
八幡高原文化の道で残されているサインの再利用or建て替えを検討
（グラフィック／記載内容などの再整理）
場所によって、回遊サインも併設する

禁止サイン（プロットなし）

観光客に向けて、立入禁止や最低限のマナーを喚起するための、
禁止事項を表記するサイン。

仮設サイン（プロットなし）

聖湖マラソンや自転車の競技イベントなど特別なときに設置するサイン。
持ち運び等が容易な組み立て式のサインを地区産材を用いて制作。



3. 八幡地区の整備計画

3-1. 八幡地区の景観整備の考え方

サイン整備を進めるにあたって、八幡地区の美しい田園と里山景観を守るうえでの地域づくりの考え方を検討する。
芸北地区で見られる"薪活"のように、里山の保全がエネルギーの生産とリンクして循環するように、八幡地区におけるサイン整備や景観整備が同じく田園景観、里山景観を守る仕組みの一つとして捉えることができないかを検討する。

●それぞれが相乗効果を高める関係を築く

例）
魅力的な情報発信であるからこそ行きたくなる
↓↑
美しい景観であるからこそ情報発信がシンプルで力強い

常に里山からエネルギーとなる木材を調達
↓↑
間伐することで里山景観の保全につながる

経年変化と劣化を前提としたサインや公共設備
↓↑
メンテナンスを前提とし地域づくりへの意識醸成と、
資本、人、情報が地域内を循環する仕組みづくり

高原らしさを感じる"木"の積極的利用

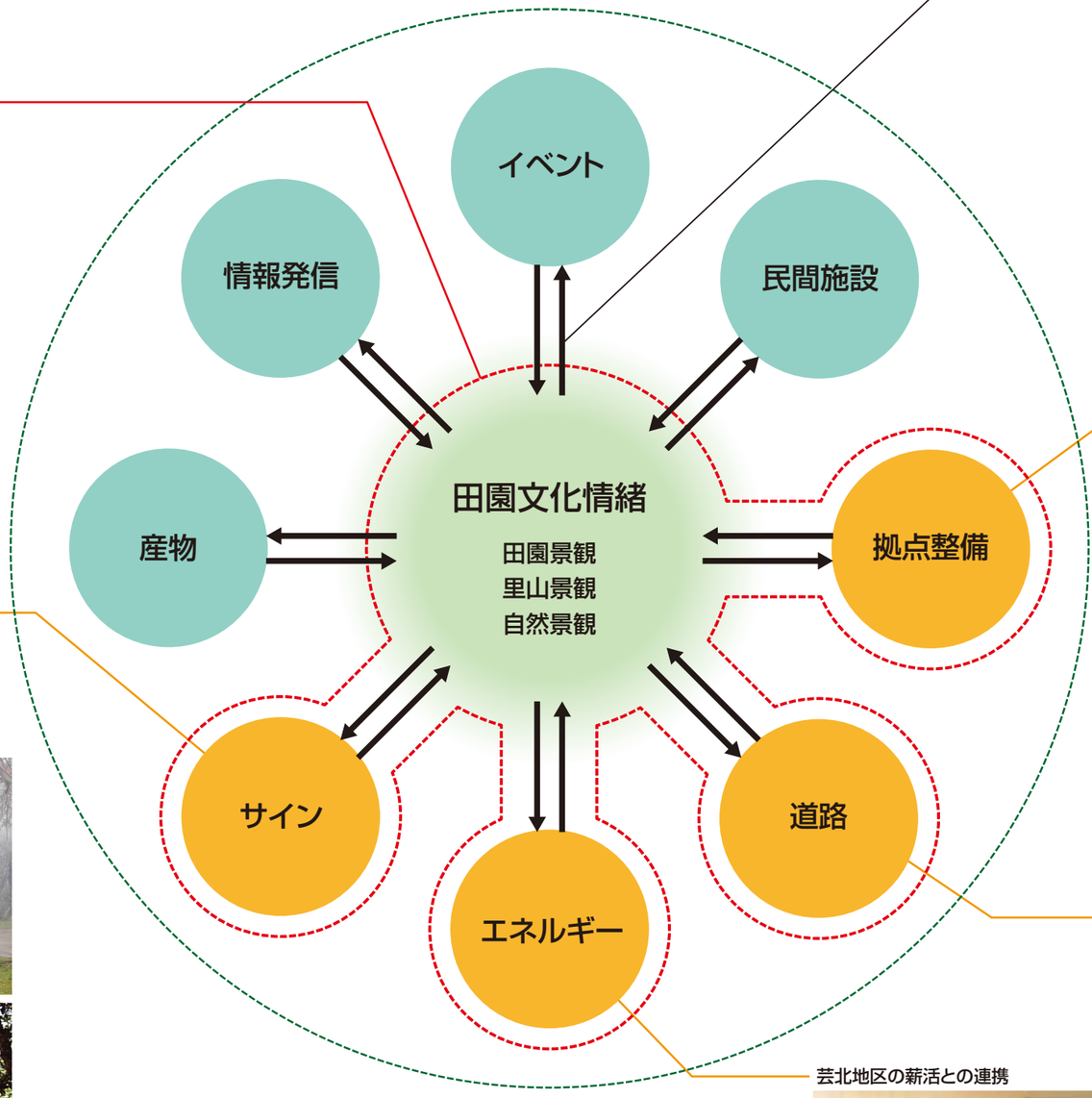
八幡地区の地域づくりの考え方

木材 or 木の素材感がつくる雰囲気を大切にする

木材の積極的利用により、里山の保全につなげる。
木の素材感を感じさせることによる里山感の演出。
様々な要素を通じて田園文化情緒を醸成することが大切。
↓
持続可能な景観保全、維持管理のため、
「八幡地区森林管理組合」
「山県郡木材組合連合会」
「北広島町商工会」「地区内商店主」
などが中心となり整備をする。（資本が町内を循環する仕組みを検討）
町内で制作できるものであることが重要

木材を積極的活用したデザイン
or
木の素材感を意図したデザイン

参考イメージ



「八幡地区らしさ」を醸成するとともに
「北広島町らしさ」につながる

木製ベンチ、ウッドデッキや、田園の社の整備
（参考イメージ）

高原の道路景観整備として、木製ガードレールや、
木製横断防止柵同の設置を検討する
（※北海道の事例:雪にも耐える木製ガードレール）

芸北地区の薪活との連携

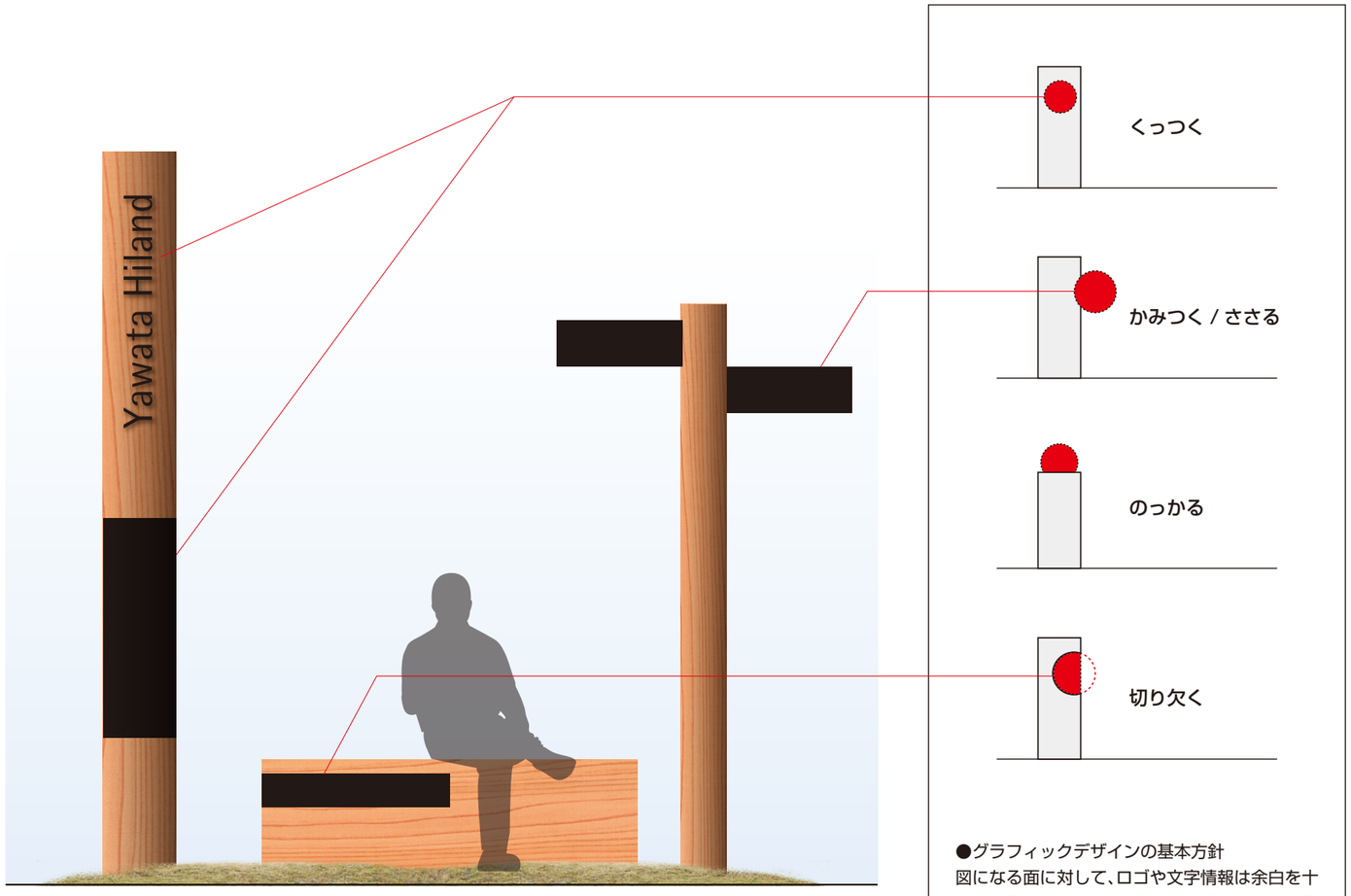
3-2. サインデザインコンセプト

Yawata Hiland Rural Composition

高原特有の景観に基づく八幡地区の環境整備の考え方、”木材 or 木の素材感がつくる雰囲気を大切にする”に基づき、筐体や色彩などの考え方を「Yawata Hiland Rural Composition」として位置づけ各定義づけを行う。

1. 筐体デザインの基本方針 - 70%以上が木or木質

サインの筐体の面積の 70% 以上を木質感が感じられることを
前提に一連のサインデザインを検討することとする。（※1 面でなく全体の中で割合を検討）
サイン筐体や環境設備も地域を循環する仕組みの一部となるよう、
町内で制作できるような材料選定をすることが大切である。
もちろんメンテナンスや更新、建て替えも町内で行う。



●グラフィックデザインの基本方針
図になる面に対して、ロゴや文字情報は余白を十分にとるなど、モダンで精緻な印象が与えられるよう十分に配慮する。

2. 情報の出し方の基本方針

木質の筐体が【地】となり情報はそこに付加される【図】である。様々な【図】が【地】の面積を確保しながらどのように寄り添うのか、その考え方を整理することで、用途に合わせたサイン検討時の手がかりとする。

3. 八幡の色彩の基本方針

筐体の基本方針のもと、木部分を“アースカラー”と位置づけ、それを支える色として無彩色･素材色にきたひろグリーンを加えたものを基本色とする。また、さまざまな設定色（サイクリングコースetc）などのアクセントカラーとともに、背景の多様なグリーン、パッケージに展開された場合の中に入る野菜などのマルチカラーを支える意味でも八幡地区のベースカラーは落ち着いた色彩が望ましい。

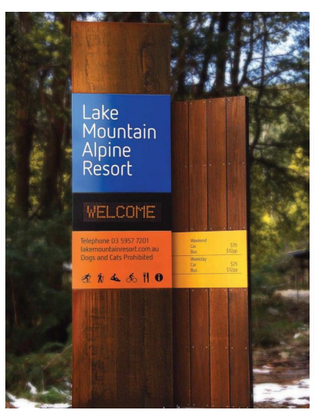
3-3. サインデザイン参考事例から考える方向性

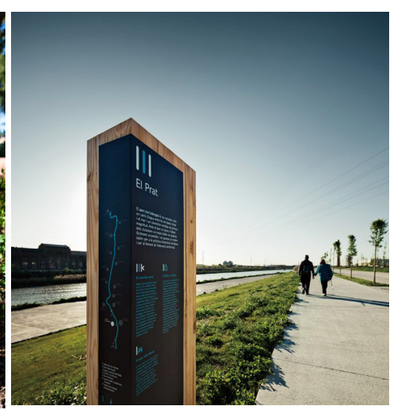
下に示したイメージ写真は八幡地区のらしさづくりに寄与する素材感等をイメージしたものである。
仮に比較として芸北高原を想定したが、実際にはサイン整備重点地区ごとにふさわしい姿がある。

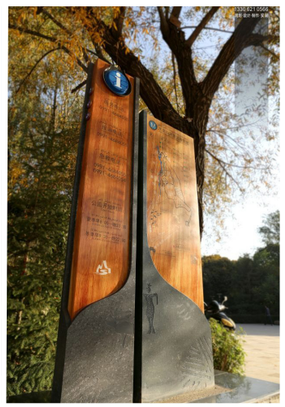
例）

八幡高原 ⟷ 芸北高原

木質割合“大”　　木質割合“小”



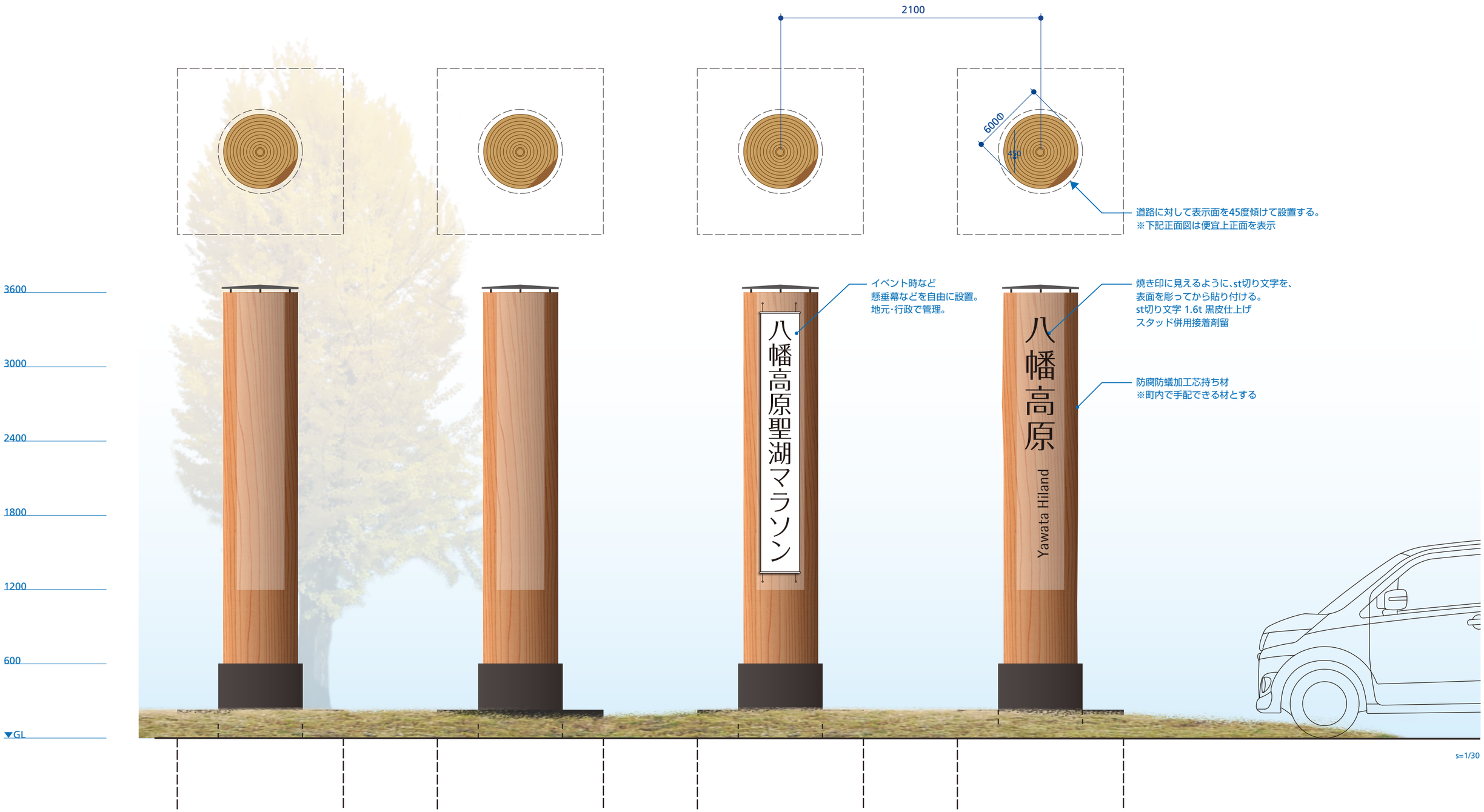




3-4. 八幡地区のサインデザイン案 -1

G 境界サイン

八幡高原に来たことを伝えるサイン

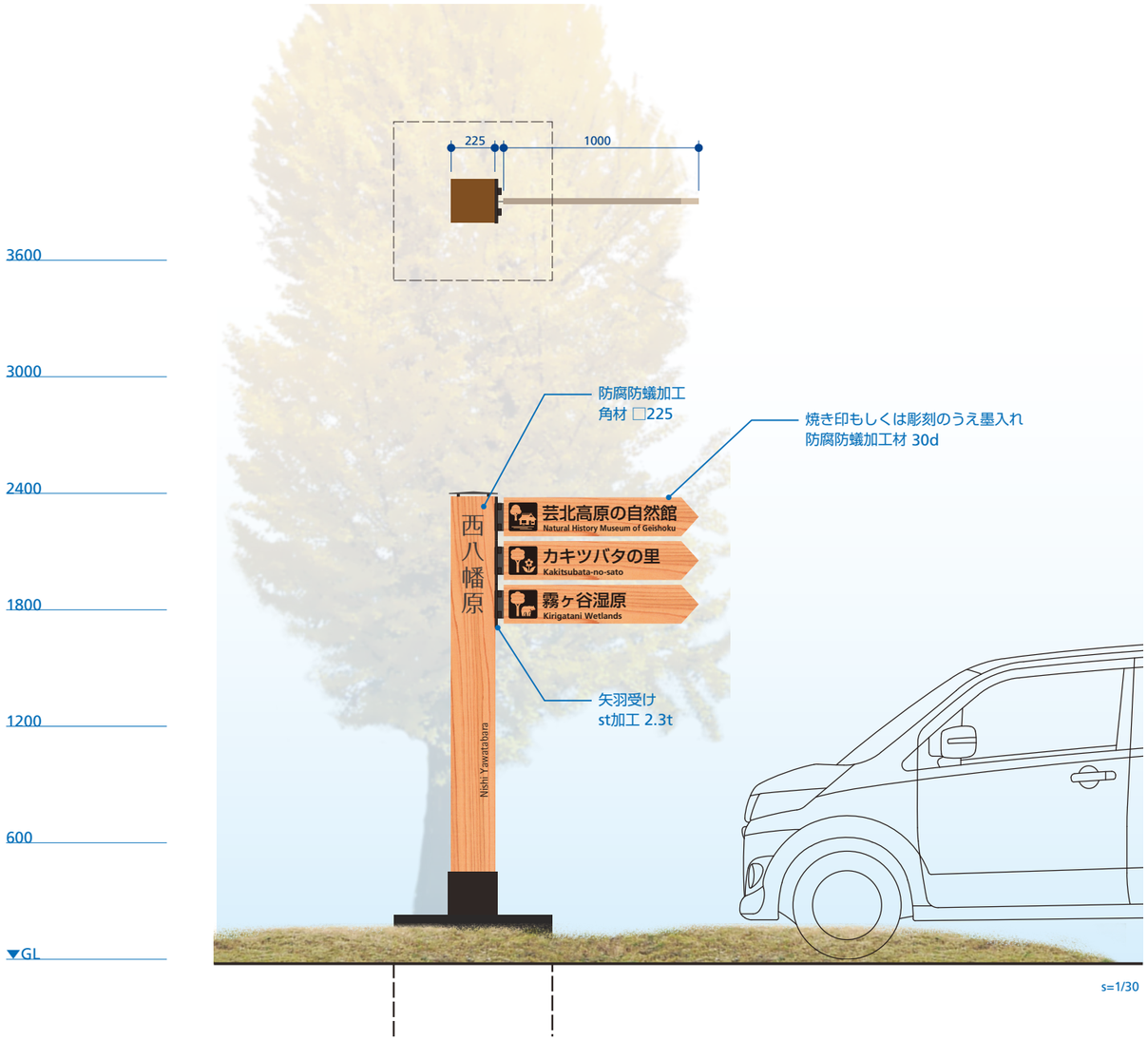


3-4. 八幡地区のサインデザイン案 -2

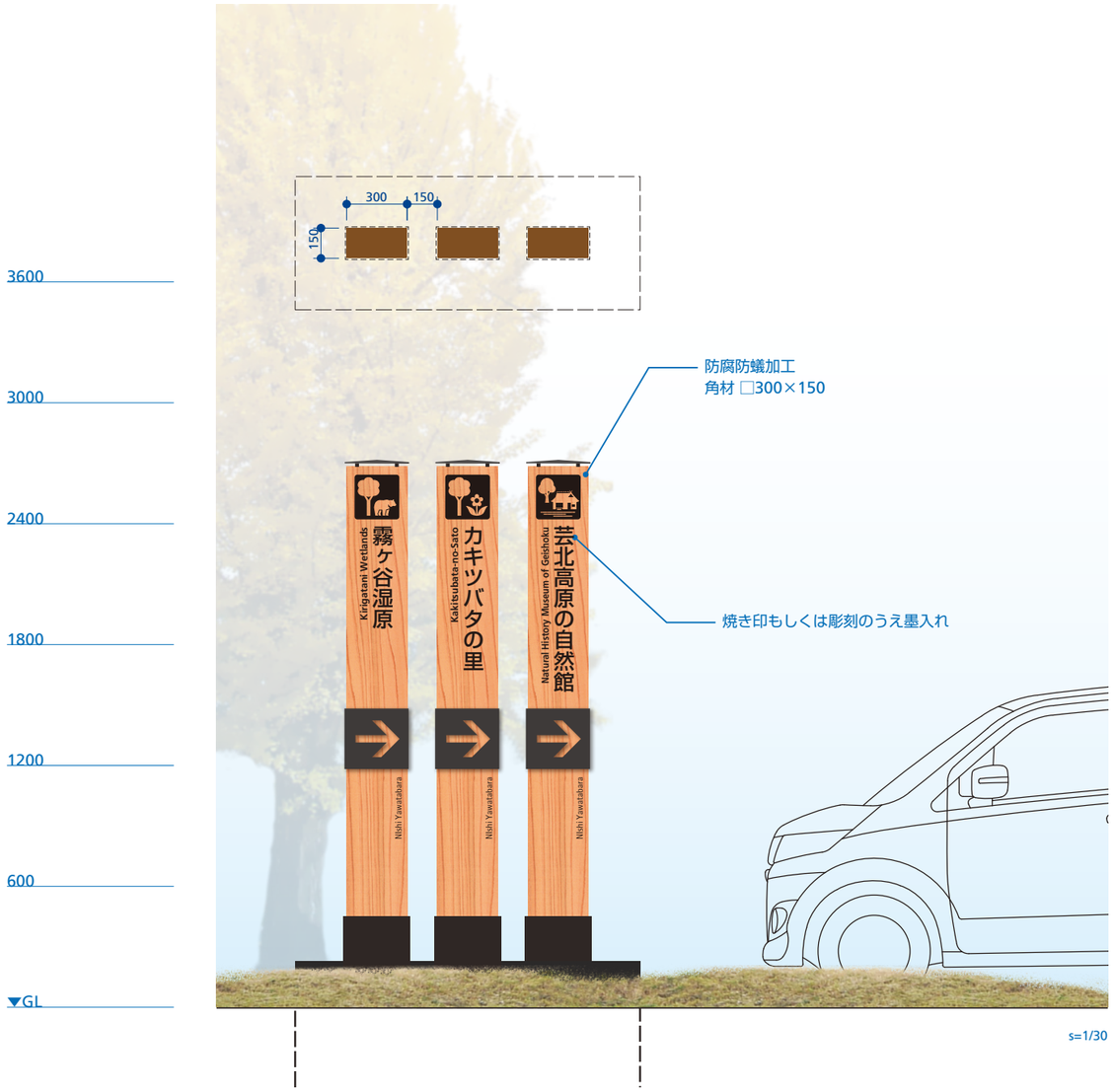
誘導サイン

基本的には広島県の設置するサインを案内の基本とするが、主要な交差点にはそれをフォローするようにサインを整備するか、その場所自体の環境整備を推進する。

パターンA:矢羽タイプ



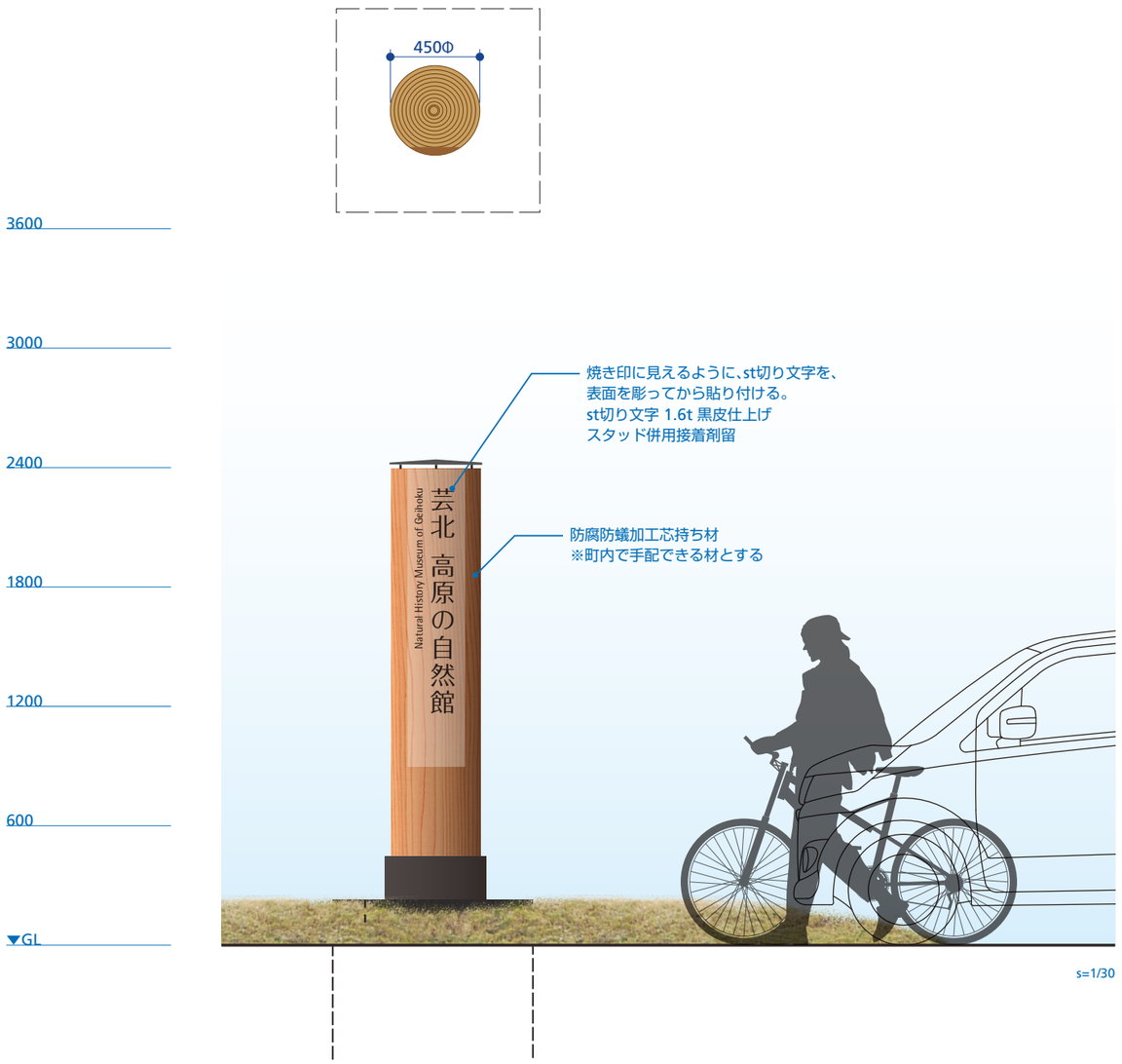
パターンB:直立タイプ



3-4. 八幡地区のサインデザイン案 -3

施設記名サイン

到着を知らせる所在サインを「芸北　高原の自然館」や「八幡高原センター」に設置する。合わせてロゴタイプも今後検討する必要がある。
車よりは自転車目線の大きさとする。

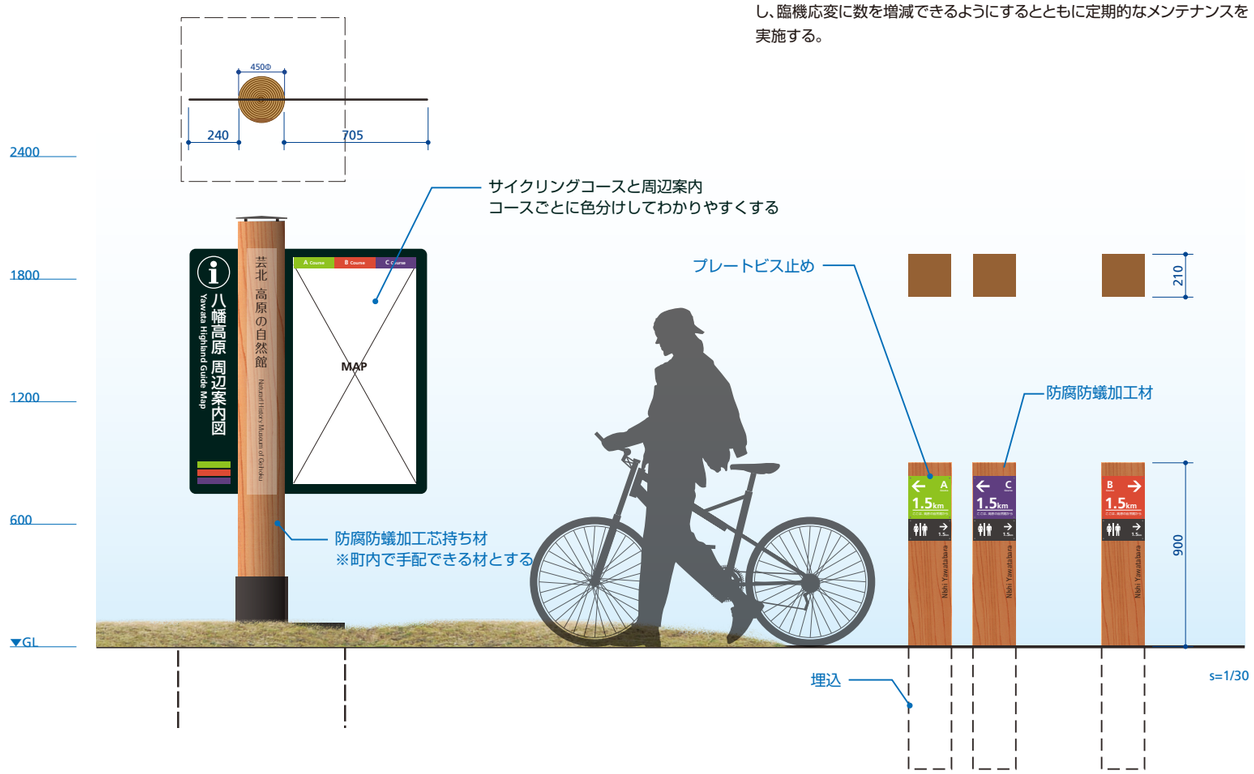


八幡地区案内サイン

八幡地区全体マップと回遊ルート･見どころを示す。
高原の自然館／八幡高原センター／古代八幡湖遠望地／聖湖南端に設置を検討。

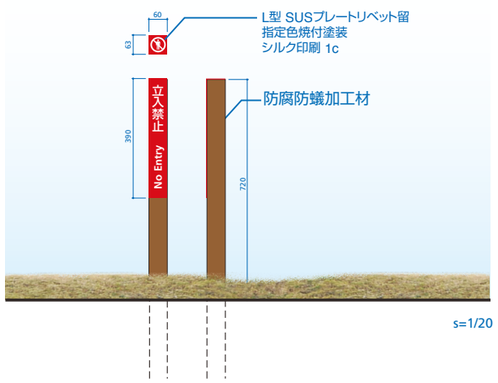
回遊サイン

高原の自然館を起点に回遊ルートを示すサイン
各交差点などや距離単位で設置し、高原の自然館からの距離やトイレの方向など必要に応じて記載する。基礎無しの埋め込み式のシンプルな形状とし、臨機応変に数を増減できるようにするとともに定期的なメンテナンスを実施する。



禁止サイン（プロットなし）

観光客に向けて、立入禁止や最低限のマナーを喚起するための、禁止事項を表記するサイン。以下は立ち入り禁止の例

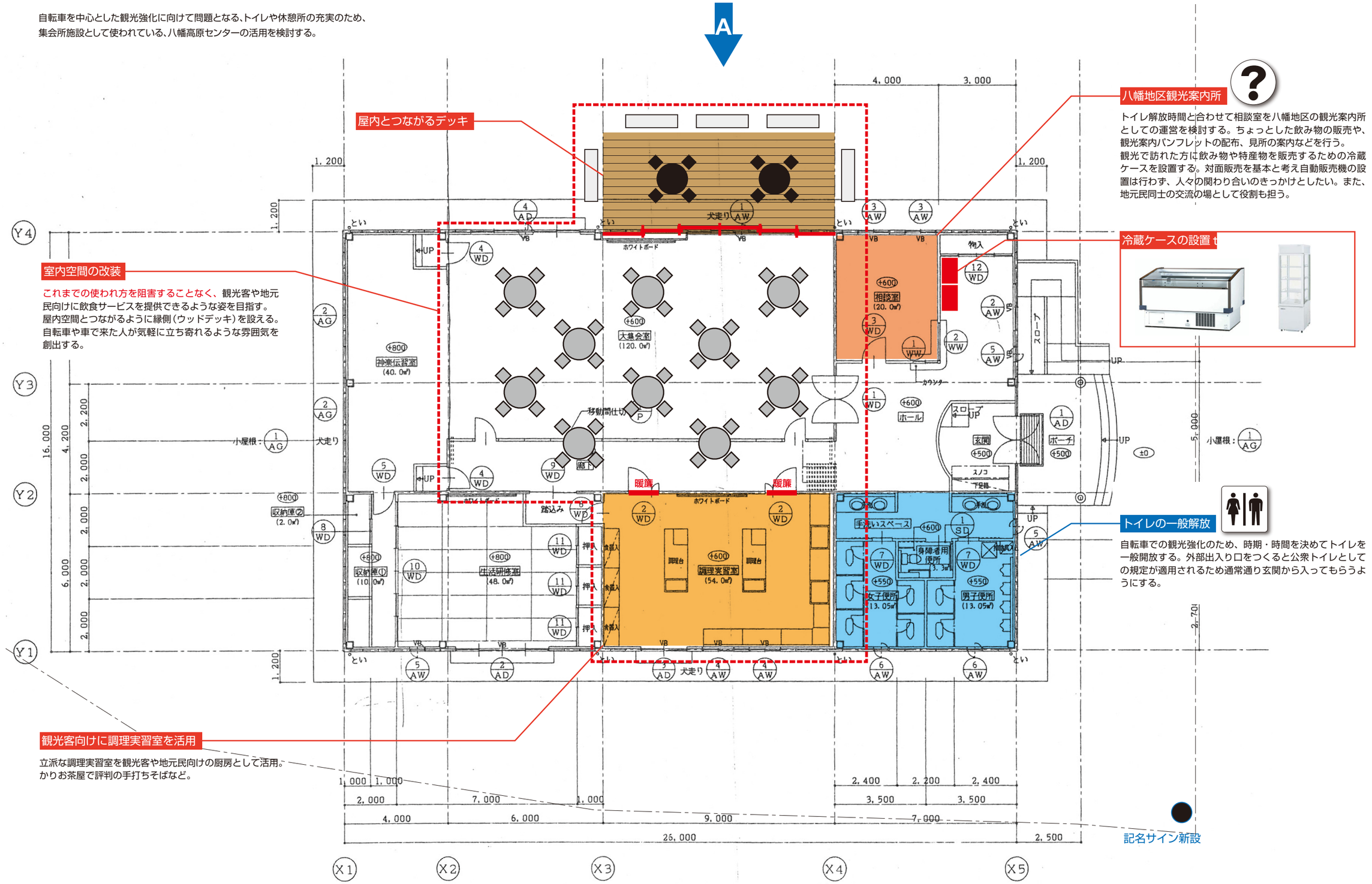


仮設サイン（プロットなし）

聖湖マラソンや自転車の競技イベントなど特別なときに設置するサイン。
持ち運び等が用意な組み立て式のサインを地区産材を用いて制作。

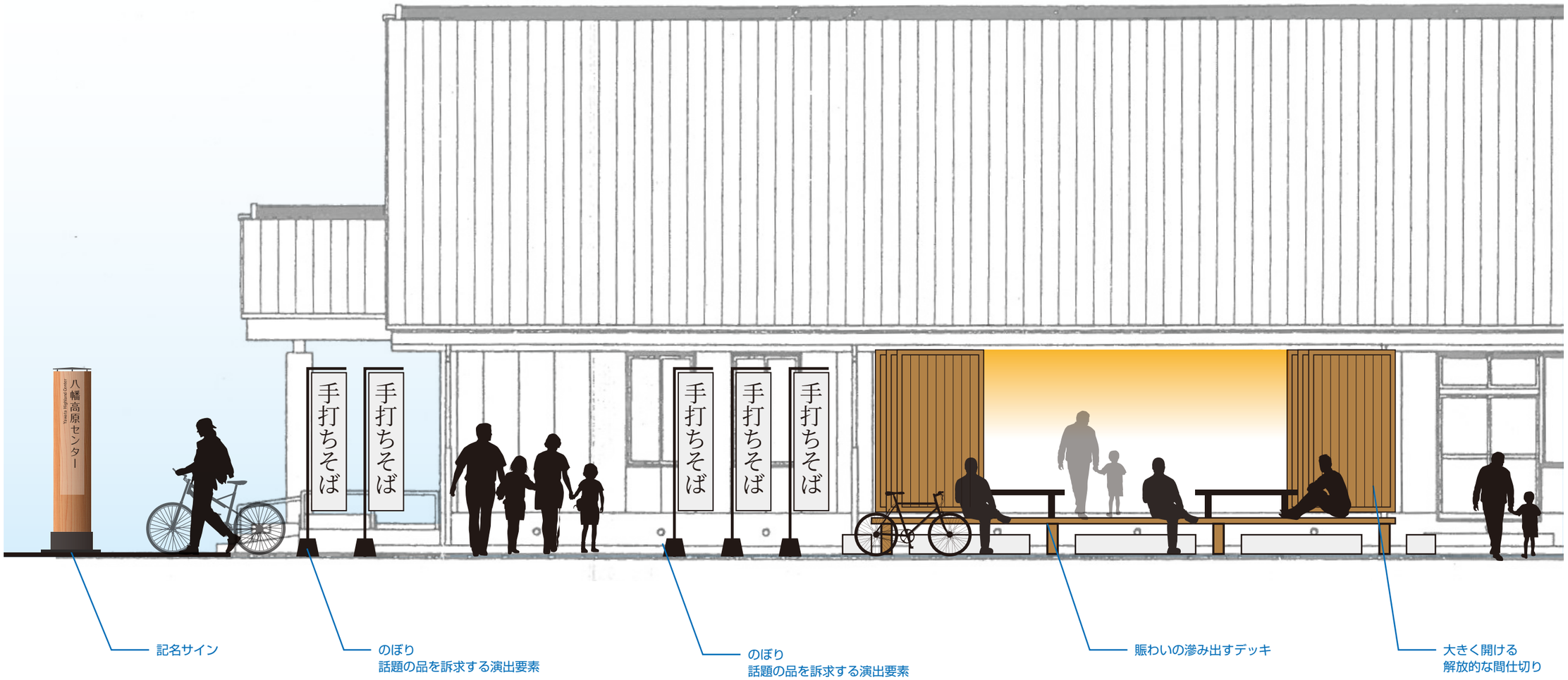
3-5. 八幡地高原センターの活用についての考え方：平面図

自転車を中心とした観光強化に向けて問題となる、トイレや休憩所の充実のため、
集会所施設として使われている、八幡高原センターの活用を検討する。



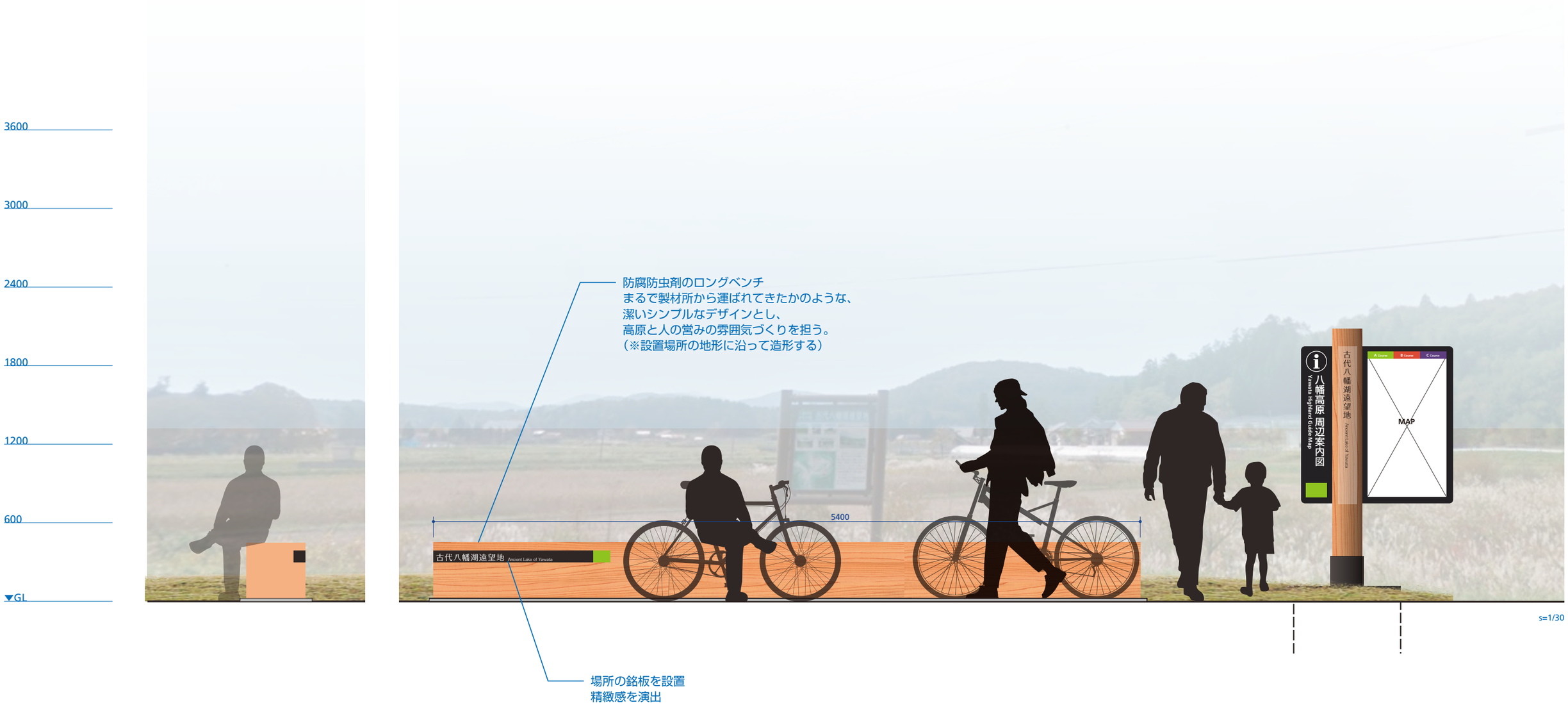
3-5. 八幡地高原センターの活用についての考え方：A 矢視立面図

現在駐車場的に使われている広場に向けて解放的かつ賑わいのある空間をつくる。
自転車で訪れる人々をターゲットにしながらも車での利用にも対応し、八幡地区の観光中核施設としても位置づける。



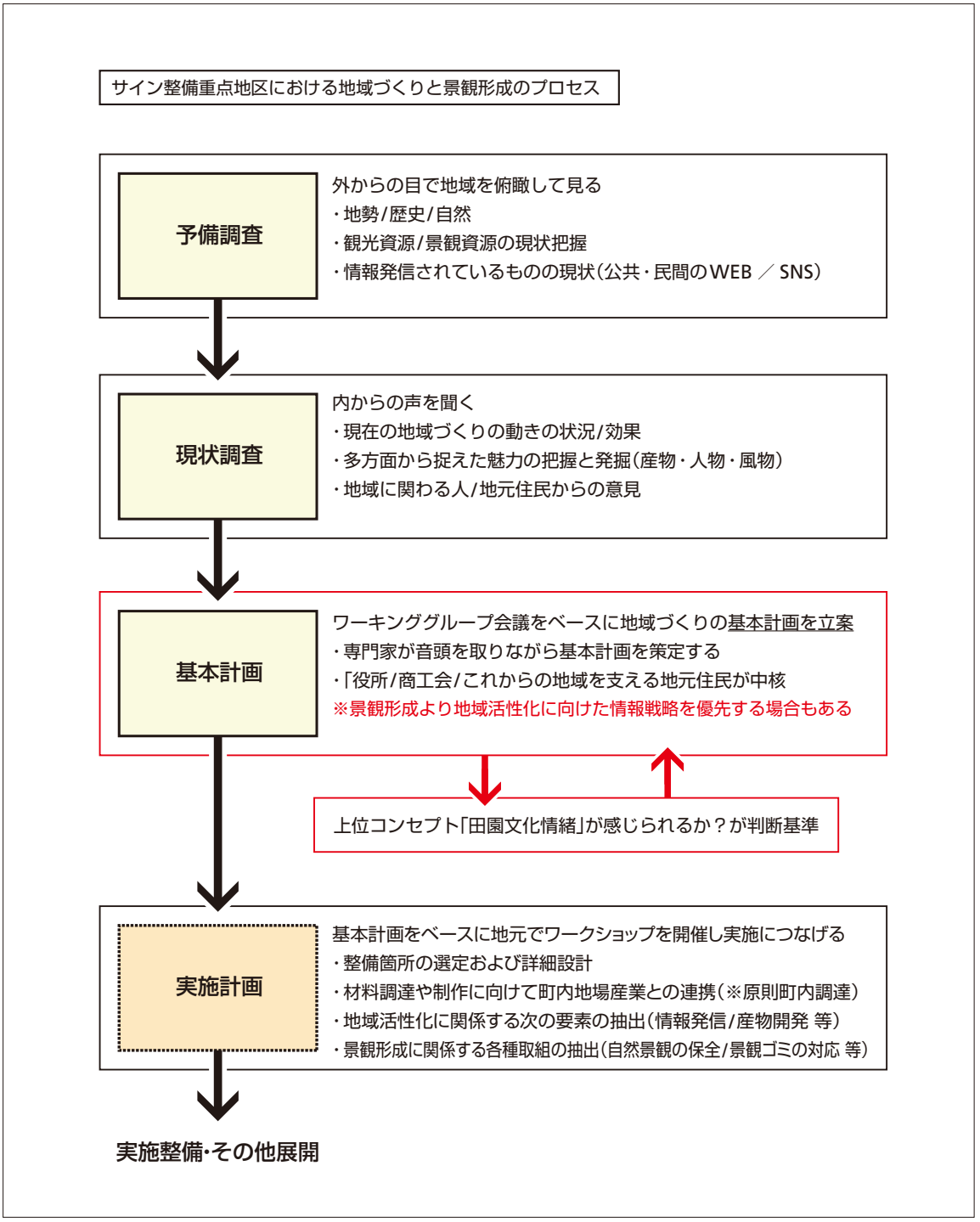
3-6. 眺望ポイントにおける設えの考え方

現在駐車場的に使われている広場に向けて解放的かつ賑わいのある空間をつくる。
比較的広い場所に横長のベンチと周辺案内を設置し、広々とした休憩スペースを設える。



4. 実施整備に向けて

4-1. 景観形成と地域づくりのプロセス

■八幡地区におけるケーススタディから実施に向けてのプロセス
ケーススタディとしてまとめた八幡地区の基本計画を次年度以降、八幡地区の住民に向けて報告会を行うとともに、さらに計画の具体化に向けてワークショップを重ねるなどの動きを進めていく。
今回住民との意見交換会等において挙がった意見を可能な範囲で計画に盛り込むことで、自分たちが自分たちの地域をより良くしていくという流れをつくるとともに、サインを含めた景観形成そのものが、人、資本、情報の循環を促すものの1つであるという認識を共有することを目標としている。

■サイン整備重点地区における景観形成と地域づくりのプロセス
今回八幡地区をモデルケースとして進めたプロセスをダイアグラムとして以下にまとめる。
次年度以降、このプロセスを参考にしながら次の候補地での新たな流れを作ることを目指す。